奈良県立商科大学「研究季報」第7巻 第2号（1996年10月11日）

〔資料紹介〕

「嘉永三年戌春大新校 大坂天狗文日寄」

― 幕末大坂周辺年中行事史料の紹介 ―

田中　豊

大阪市立中央図書館所蔵の「大坂天狗文日寄」は縦37センチ、横97.5センチ、二枚の刷物を51.5センチの所で貼り継いで一枚刷に仕立てたものである。刊記は嘉永2年（1849）となっているが、「新校」とあり、昭和38年（1963）に出口神暁氏編の『大阪年中行事資料　第一揖』（和泉文化研究会）で紹介されている「浪華の日奈美」が弘化4年（1846）に刊行されており、内容もほとんど変化がないことから、本史料はその改定再版と考えられる。体裁についても、表題を「大坂天狗文日寄」と改めて旧題「浪華のひなみ（日奈美）」を副題にし、両面刷であったものを一枚刷の形にしている。著者については大坂の小野原公春と記しているが、当時の人名録等には見当たらない人物である。板元の伏見の亀屋半兵衛、大坂の石川屋和助は弘化4年版と変わっていない。

本史料は大坂とその周辺部、特に摂津国を中心とした年中行事を詳細に記したものである。弘化4年版の表題「浪華の日奈美」は日次（ひなみ）であり、日毎にすることの意味で、大坂を中心とした年中行事録を意図している。これが「大坂天狗文日寄」となったのは、日次の意味がわかりにくいため遊廓などの特別な日を意味をしたなじみやすい言葉である紋（文）日に改め、大坂の自慢すべきものということで「大坂天狗」と付したのであろう。

内容を検討していくと、寺社の祭礼・行事を中心に四季折々の風物や、大坂の名所・名物等を記しており、一種の観光案内書にもなっている。近世都市民衆は盛んに寺社参詣を行なうが、それも時代を追うごとに物見遊山化の度を増していった。信仰と娯楽というものが一体化しだすのである。そうした風潮と本史料及び類書の刊行は無縁ではない。例を挙げれば、開帳という寺社の秘仏・秘宝を特別に公開する宗教行事の場に、見世物小屋などが設けられて人気を博したり、神社の再建や修築時の遷宮に際して行なわれた信者による砂持神事が仮装パレード化するなどである。本史料の刊行の意図も信者に各地域の寺社の祭礼・行事の情報を知らせるというよりも、一年間の祭礼・行事を含めたイベントや風物のガイドブックと考えたほうが適切かもしれない。

こうした大坂を中心とした年中行事を記した類書は早くは『難波丸綱目』中の「年中行事」をはじめいくつかあるが、いずれも本史料より以前に刊行されており、おそらく著者はそうしたものを参考に、さらに『摂津名所図会』などの地誌類を調べて作成したと推量される。しかし本史料だけに記されている祭礼も相当数あることから、みずから足を運ぶなどして記述したところもあると考えられる。しかし祭礼の日付けについては他史料と異同がみられる。これは当時使用されていた太陰太陽暦の性格上、大の月・小の月が年によって違ったり、二十四節気を基に設定された日もあったためとも考えられ、いちがいに誤りとは断定できない面もある。ともあれコンパクトな年中行事案内書として刊行されたと思われる。

今一つ注目すべきはその地域的広がりである。

私も以前に近世大坂の開帳について論じた際（「近世大坂開帳考」『津田秀夫先生古稀記念論集　封建社会と近代』所収　1989年刊行）、近世後期になると大坂市中から離れた場所、例えば吉野山の開帳などに大坂から見物人が多く繰り出しており、開帳見物という名目の下に小旅行気分を楽しむという物見遊山の行動範囲の広がりを指摘した。本史料もそうした様相を如実にあらわしているといってよい。具体的に記述されている地域名を示すと、現市町村名でいうと大阪府では大阪市・豊中市・池田市・箕面市・能勢町・吹田市・摂津市・茨木市・高槻市・大東市・東大阪市・八尾市・堺市・岸和田市、兵庫県では尼崎市・西宮市・芦屋市・神戸市・川西市・宝塚市、奈良県では生駒市・平群町であり、旧国名でいうと摂津国のほぼ全域、河内国の中河内地域、堺を中心とした和泉国、そして大和国の一部となっている。そのうち大和は信貴山や生駒山などむしろ大坂寄りの限定された場所である。これらは大坂市中の人びとにとって比較的なじみ深い地域ではあるが、神戸市北部などのように日帰りが無理な所も含まれているのである。そして摂津国・中河内・堺という地域に記述を限定してるのは大坂市中の人びとの地元意識を配慮しためであろう。

このように本史料は幕末大坂周辺年中行事史料として注目すべきものであり、近世都市民衆の行動文化の様相を知る上で利用価値が高いと考えられる。

翻刻に際しては、なるべく原文に忠実であることを心がけたが、本誌の横書きという性格からやむを得ず表記法を改変したところもあるが原文を損なっていないと思っている。本史料にはふりがなが付された所が多いが、編集上難読のもののみを（　）内に記した。史料でひらがなで表記されているが漢字のほうがわかりやすいものについては同じく（　）内に漢字を記した。また文中の七か所に挿絵が入っているが簡略なものなのでここではその位置と文章のみを掲載するにとどめた。

補注については、本文史料を補足し、誤りをただすことを目的として付した。それもなるべく同時代の史料を引用することによって、史料的広がりを与えたつもりである。しかし十日戎・天神祭や堂島米市など余りにも有名なものについてはスペースの関係もあって補注からはずしている。なるべく現市町村名を記しておいたが、現大阪市域に入るものを記すと煩雑になるので除外した。神戸市についてはその範囲が広いので区名まで入れている。なお補注が多いため、ページの左部分に本文、右部分に補注という変則的な構成にして、対照しやすいよう編集した。

補注として利用した主要な史料名を列記しておくと、寛政８～10年（1796～98）刊の秋里籬島『摂津名所図会』（森修編『日本名所風俗図会10大阪の巻』所収　1980年刊　角川書店）、安政２年（1885）刊の暁鐘成『浪華の賑ひ』（同前所収）、安政２年ごろ成立の暁鐘成『摂津名所図会大成』（船越政一郎編『浪速叢書８・９』1927年刊　浪速叢書刊行会）、寛政６年刊の秋里籬島『住吉名勝図会』（『浪速叢書13』　1927年刊）、安永６年（1777）版『校本　難波丸綱目』（野間光辰鑑修　1977年刊　中尾松泉堂書店）、文化11年（1814）ごろ成立の砭泉老人『大阪繁花風土記』（1923年刊　だるまや書店）である。

なお補注では標記の煩雑さを避けるため上記史料名を以下のように略記した。

『摂津名所図会』→『摂津』
『摂津名所図会大成』→『大成』
『住吉名勝図会』→『住吉』
『浪華の賑ひ』→『浪華』
『校本　難波丸綱目』→『難波丸』
『大阪繁花風土記』→『風土記』

前述したように本史料の元版がすでに出口伸暁氏によって紹介されているが、これについては弘化４年版を実際に目にしていないので断定はできないが、史料翻刻に際してひらがなを漢字に変えるなど必ずしも原文通りでなく誤読もあること、現在入手困難な著書であること、同時代の他史料による補足も必要であることなどを考慮して、改めて史料紹介する意義があると考えた次第である。

本史料の掲載を快諾いただいた大阪市立中央図書館に深謝します。

嘉永三年戊春大新校

大坂天狗文日寄

正月	節分諸方宮々星祭
	参けいおびたゞしく飴を商ふ
初卯	住吉の神事
朔日	同寅の刻神事[1]
同	天王寺修正会[2]
同	同　万石米[3]
同	愛染まつり[4]
同	天満大将軍神事
二日	有馬温泉入初儀式[5]
三日	岡本村まつり[6]
四日	淀屋橋米初市
五日より十四日迄	天王寺修正会[7]
七日	箕面山弁天福富[8]
同	生玉弁天ごま（護摩）[9]
同	久安寺毘沙門富[10]
同	甲山福とみ（富）[11]
八日	五大力加持香水
同	森宮御弓
同	有馬牛王[12]
［図］「九日・十日　今宮戎・堀川戎祭」	
九日	西之宮居篭（ゐこもり）[13]
十日	住吉御狩
同	甲山イフシ（燻）祭[14]
十二日	うぶゆひめこそ（産湯比売許曽）の宮神事
同	同さかきでん（賢木殿）神事
十三日	住よし（吉）御弓[15]
十四日	天王寺とんど[16]・天満天神同　其他はまはまにあり
同	八まん（幡）御弓
同	天王寺寅の御守
同	天神恵方綱
同	平（枚）岡明神開帳[17]
同	岸部村かゆ（粥）占[18]
同	成合村菅かゆ祭[19]
十五日	信貴山毘沙門福富[20]
同	慈恩じ（寺）とみ[21]
同	三ツ八まん（御津八幡）御弓
同	天満神明御弓[22]
十六日	なんば（難波）綱引[23]
正・五・九月十六日	天王寺大般若

補注

(1)　『住吉』「辰半尅奉神供」。

(2)　『摂津』「六時堂修正会」。

(3)　『摂津』「食堂万石米」。

(4)　『虚実柳巷方言』新町・堀江遊廓愛染参り。

(5)　現神戸市北区、『摂津』常喜山温泉寺「毎歳正月二日、開山僧正・中祖上人の両像を温泉の浴室に供奉し、入初の儀式あり」。

(6)　現神戸市東灘区、『本山村誌』「岡本村牛頭天王例祭」。

(7)　『大成』「太子堂生身供」。

(8)　現箕面市、『摂津』滝安寺観音堂前、「この富会は年ふるき事にて、和歌に富突山と詠じたる事あり」。

(9)　『摂津』では同日生国魂神社弁財天祠で富ありとし、護摩については記載なし。

(10)　現池田市、『摂津』伏尾村久安寺奥院慈恩寺、「今毘沙門天を安ず。（中略）毎年正月十五日ここにて富法会ありて牛王の神札を出だす」。

(11)　現西宮市、『摂津』神呪寺鎮守「弁財天女を安ず。（中略）正月七日の夜に福富の法会あり」。

(12)　現神戸市北区、『摂津』温泉寺「八日村民堂内に集会して拝礼し、牛王宝印を調ふ」。

(13)　現西宮市、『摂津』「毎歳正月十日は居籠祭とて、（中略）この御神広田社へ臨降ます。御像の悪きにより人目をはづかしくおもひたまふ諺ありて、市中の民家ことごとく門戸をかたく閉ぢ、筵・簾など垂れて門松を逆しまに立てけり。内には遠近の親しきやから・知己の者多く来たりて、酒のみ豆腐の串焼きし羹などを調へ、一夜禁足して物静かに神祭をつとむ」。

(14)　現宝塚市、『摂津』伊刁志村上方塩尾寺、「正月十日寅の刻を観音の会式として、村民おのおの炬（たいまつ）を燃して群詣す」。

(15)　『住吉』「巳之尅御結鎮神事」。

(16)　『風土記』「十五日、（中略）早朝には諸方の宮々はじめ所々の浜々にてとんと有。（中略）諸人其火をうつしとりて小豆粥を煮る。天満宮にも朝まいりの人上の如く宮の火を火縄にうつして取てかへる」。

(17)　現東大阪市、『河内名所図会』御粥占之神事。

(18)　現吹田市、『摂津』吉志部神祠。

十七日　御りやう（霊）御弓
十八日　藤（葛）井寺福富[24]
十九日　八まん厄神祭[25]
十九日より廿五日迄　元祖御忌（ぎよき）寺々に勤る
廿　日　西之宮戎祭[26]
同　　野里村一時女郎[27]
廿二日　座摩宮湯立
廿四日　生玉ふくとみ
同　　八尾地蔵福富[28]
廿五日　初天神　さんけい（参詣）おびたゝし
同　　道明寺天神祭[29]
廿八日　清荒神ふくとみ[30]
同　　御りやう荒神富[31]
○梅　梅のやくし（薬師）[32]・梅やしき（屋敷）[33]・野中のくわんおん（観音）[34]・北の（野）[35]・天満天神・九条戎嶋[36]・上宮
○若菜　天下茶屋・手つか（帝塚）山[37]

二　月

初　午　御城ばんば（馬場）[38]・御屋鋪方[39]・うぶゆ（産湯）・さなだ（真田）山・赤手拭[40]・川口御やしき（屋敷）大筒力持
其外所々の社賑々し
摩耶山祭[41]
朔　日　大念仏吉野花供[42]
二　日　行基まつり[43]
三　日　箕面山二ノ富
十　日　長洲まつり[44]
十一日　かしままつり[45]
十五日　天王寺涅槃会
同　　阿みだ池涅槃会
同　　多田まつり[46]
廿　日　住吉三月会定
廿二日　天王寺聖霊会　れいじん（伶人）の舞有
△ひがん（彼岸）　同参詣おびたゞし
ひがん中くちなハさか（口縄坂）三五（珊瑚）寺秀吉公像淀君の書翰、下寺町浄国寺にて夕ぎり（霧）のうちかけ見せる[47]、天王寺東国分寺血天井
中日大念仏方丈天王寺御さんけい[48]
○桃花　廿二日比より
桃山・天王寺より東北　うぶゆ・真田山辺多し
天満ばし（橋）・稲田村[49]

(19) 現高槻市、『摂津』安満神祠、「村民社頭に会し粥を煮て管三本に早稲・中稲・晩稲と印を付けて粥の釜へ入れともに煮る。その粥管の中に入りたる分量の多少をもつて豊凶を占ふ」。
(20) 現平群町、『風土記』「此日ハ信貴山毘沙門江初参とてのほる人多し。別して南辺の人多し」。
(21) 現箕面市、(10)参照。
(22) 西天満夕日神明宮。『難波丸』では16日。
(23) 『浪華』牛頭天王社、「難波村にあり。俗になんばの祇園といふ」。
(24) 現藤井寺市。
(25) 『難波丸』「三津八まん厄神参り」。
(26) 現西宮市、吉井貞俊『えびす信仰とその風土』に、社頭日誌に「二十日戎」という行事あり。
(27) 『摂津』野里村本居神（うぶすな）「一夜官女」。
(28) 現八尾市、常光寺の俗称。
(29) 現藤井寺市。
(30) 現宝塚市、蓬莱山清澄寺荒神社の俗称。
(31) 御霊神社末社。
(32) 『摂津』玉造稲荷近隣にあり。本尊石薬師。
(33) 『浪華』「上の宮より乾の方にして、生玉馬場の東にあり」、江戸の亀戸のものを模した。
(34) 東高津遍明院。俗称難波寺。
(35) 『風土記』北野常安寺、「影向の梅といふ」。
(36) 『風土記』天満宮御旅所、「鳥居の北にあり」。
(37) 『大成』「此所ハ四面にさわりなき一堆の丘」。
(38) 『風土記』「御城の馬場ハ大群集。一めんの紙鳶（いか）のほりにて空を覆ふ」。
(39) 『風土記』「諸方御蔵屋敷賑わし」。
(40) 『浪華』難波村「田甫の中に赤手拭と号する稲荷の祠あり、（中略）二月初午の日は遠近より詣人群をなす」。
(41) 現神戸市灘区、『摂津』仏母摩耶山忉利天上寺観音堂。
(42) 『摂津』「二月に和州吉野の華供養執行の時、当国西成郡浜村源光寺より鏡餐（もち）を当寺（大念仏寺）の本尊に供ず。当寺よりまた末広扇一本、苧二束鏡餐に添へて吉野山子守勝手明神ならびに蔵王堂に備へ」。
(43) 『難波丸』「住吉・大和塩葉両日」とあり。
(44) 現尼崎市、長洲天神。『摂津』では25日。
(45) 本庄村鹿島神社か。
(46) 現川西市多田神社か。
(47) 『大成』同寺に夕霧の墳（つか）あり。

○すもゝ　このべ[50]
○雲雀　あべの（阿倍野）海道

三　月

二　日　天王寺ゑん（縁）の下の舞[51]
［図］「三　日　住よし（吉）汐干[52]
　　駕籠かりて淡路へのらん潮干哉　如泉」
三　日　住よし鳥あわせ（合）[53]
同　　熊野権現法会
八　日　住吉御がくまひ（楽舞）[54]
同　　同　神宮寺法会[55]
九　日　野田打死御書[56]
同　　兵庫七の宮祭[57]
十五日　そうせんじ（崇禅寺）祭[58]
同日より廿二日迄　中山寺無縁経[59]
廿一日　神宮寺たがいの御影
同　　ばくろ（博労）町いなり（稲荷）[60]　太々
廿三日　今宮神拝[61]
同　　広田まつり[62]
廿六日　平の（野）三十歩神事[63]
○桜　　さくら（桜）の宮・北の御堂・ながらくハくまんじ（長柄鶴満寺）・新町九軒・りうせんじ（隆専寺）[64]・尼寺[65]・どうがんじ（洞岸寺）[66]・どうせんじ[67]・天王寺・安居・東門東じゅほうじ（寿法寺）[68]・幸町うら（裏）町
○摘もの　本庄・京はし（橋）掛ちやゝ（茶屋）五月まて
○松露取　すみよし（住吉）、そうぜんじばゞ（馬場）
○あゆ（鮎）汲　池田・いな（猪名）川・多田川・大和田

四　月

朔　日　生駒山宝山寺大ごま（護摩）[69]
同日より十日迄　大念仏ねり（練）供養
二日より八日まで　てつげん（鉄眼）[70]大せがき（施餓鬼）
　同　　八日迄　野ざき（崎）無縁経[71]
五　日　田辺村天神まつり[72]
八　日　あみだ（阿弥陀）池灌仏会　植木みせ（店）おびたゞし
　　其外寺々修業有
同　　住吉卯花神事
同　　天王寺仏生会[73]
同　　能せ（勢）妙見宮法会[74]

(48)　『摂津』「彼岸の時正日春秋ともに毎歳四天王寺において融通大念仏会執行の時吉野山より当寺上人供奉の役仕あり。これを太郎といふ」。
(49)　現東大阪市。
(50)　現池田市木部（きのべ・きべ）か。
(51)　『摂津』、経堂経供養「秋野房経巻を守護して、伶人楽を奏し、経堂・太子堂を行道あるなり。太子堂西の庭上にて舞楽ある。これを俗に縁下の舞といふ」。
(52)　『風土記』「住吉ハ汐干にて大群集、褄をからけてはまくりをとる人海中をうづむ」。
(53)　『住吉』「辰尅神供備進（中略）闘鶏十番。神所司これを奉行す。鶏ハ氏人よりこれを出す。闘鶏終て勝負の舞あり」。
(54)　『摂津』「大乗会、（中略）舞楽あり」。
(55)　『住吉』「八日、本堂本地」。『摂津』「九日、神宮寺今主祠法華会」。
(56)　『浪華』「證如上人住職したまふ山科の御堂を、江州佐々木定頼と日蓮宗の僧俗と一味し（中略）攻め落とし、なほまた天文二年八月大坂に責め来たり、（中略）野田・福島の門徒命を惜しまず敵を防ぎて討死し、上人を助けたりとぞ。これによつて上人討死の門下を憐み、御真筆の文章を下されける。今当村極楽寺にありて、毎年三月九日法事を勤めこれを詣人に拝せしむ。俗にこの日を野田の御書といひて賑はし」。
(57)　現神戸市兵庫区、七宮神社。
(58)　『風土記』「無縁経」。
(59)　現宝塚市、『風土記』『浪華丸』21日まで。
(60)　上難波仁徳天皇宮の摂社の俗称。
(61)　『難波丸』「今宮しんはい舞楽」。
(62)　『摂津』広田社例祭、「神拝・音楽あり」。
(63)　『摂津』三十歩神祠、平野郷中野堂町にあり。
(64)　『浪華』「境内に糸桜の大樹多く」。
(65)　月江寺の俗称。『浪華』「寺内に桜樹ありて花の頃は美麗なり」。
(66)　『浪華』「三五寺の少し東南側に洞岸寺といふ禅刹あり。境内に彼岸桜の大樹数株あり」。
(67)　『摂陽奇観』所載の「花のしをり」糸桜の名所に生玉「鳥居角　道善寺」あり。
(68)　『浪華』天王寺東門北、「当寺内に糸桜の大樹あり。花の頃は衆人群れ集ひて遊観す」。
(69)　現生駒市。
(70)　慈雲山瑞龍禅寺の開基からの俗称。

同　　玉つくり（造）練神事
同　　はつとり（服部）村まつり[75]
十四日　中寺町大雲寺練供養[76]
十五日　天王寺土塔会[77]
十七日　天満御宮御祭礼[78]
十八日　亀井御やしき（屋敷）祭
○山吹　のた町人形屋[79]・うぶゆ（産湯）・りうせんじ（隆専寺）・日くらし（暮）茶屋
○牡丹　高づ（津）吉介[80]・北のきく（菊）清、芍やく（薬）もあり
○藤花　のた（野田）名所也、大ゆうじ（太融寺）・中の天神・十三・浦江[81]・なんば（難波）・戎じま（島）[82]・増井・尼寺・いなり（稲荷）山[83]
勝田（しょうた）村ふじの花長サ四尺余もあり[84]

五　月

五　日　生玉やぶさめ（流鏑馬）
同　　ばくろ（博労）町いなりあやめ（菖蒲）神事
同　　牛のやぶ（藪）入[85]　梅田道
同　　新町太夫道中　いしやう（衣裳）見事
同　　かしま（鹿島）獅子祭
八　日　森宮御田
廿五日　本庄豊島宮まつり[86]
廿八日　住吉御田神事
晦　日　さかい（堺）方違宮祭[87]
○杜若　こぼれ（河堀）若松屋・上宮・いばらすみよし（茨住吉）・あか（赤）川[88]・うら（浦）江[89]・住吉
○つゝじ　南御どう（堂）
○さつき　なんば（難波）[90]・九条・東天満・南御堂
○時鳥　小はせ（橋）・じやうこくじ（浄国寺）・いくた（生田）・こぎり（髪切）[91]
○水鶏（くいな）　一心寺うんすい（雲水）・こや（昆陽）辺
○ほたる　梅田・野里・平の（野）つゝみ（堤）・みしまへ（三島江）[92]

六　月

朔　日　勝曼愛染まつり[93]
同　　太融寺愛染祭
七日より十四日迄　名田（灘）保久良（ほくら）祭[94]

(71)　現大東市。
(72)　現高槻市、『摂津』上宮天神祠「上田辺村の上方にあり」。
(73)　『摂津』「講堂仏生会」。
(74)　現能勢町。『摂津』「真如寺、地黄村にあり。（中略）能勢妙見堂の法用（要）当寺より勤む。（中略）妙見尊、本堂の上にあり」。
(75)　現豊中市。『摂津』神服（かんはとりの）神社。
(76)　『風土記』「中将姫のねりくやうあり」。
(77)　『摂津』「南大門の外土塔宮にてあり」。
(78)　『摂津』川崎御宮（東照宮）「例祭四月十七日、この日雑人の参詣を許したまふ」。
(79)　『風土記』「生玉のと（野堂）町人形屋」。『浪花の梅』「のど町といへる所に人形を製する家の庭前に山吹の花おひたゝし」。
(80)　植木屋の屋号。『浪華』「（高津社）石段下の植木屋には四時とも花絶えず。ことに牡丹の花壇は比類なき美観なり」。
(81)　「花のしをり」「浦江聖天宮、白ふじ」。
(82)　現堺市。
(83)　『浪華』「不動寺の北にあり、そのはじめ稲荷の祠あり、（中略）後世円頓寺といふ日蓮宗の寺を移して稲荷を鎮守とす」。
(84)　『大成』苅田（村）の藤のことか。
(85)　『浪華』「近村の農夫等おのおの養ふ所の牛に新鞍をおき、角に種々の草花を結ひつけ引き来たりて一時ばかり心の儘に駈けさせる事あり。しかすれば牛の病難を除き煩はずといへり」。
(86)　『浪華丸』「本庄豊崎宮神楽渡し」。
(87)　現堺市、『堺鑑』「此日土粽をして諸人群集をなし是を受」。
(88)　『淀川両岸一覧』「毛馬村の上にあり。一比杜若に名高かりしが今は絶たり」。
(89)　『浪華』「俗に浦江の聖天といふ、寺を了徳院と号す。（中略）境内の池に燕子花多く、花の盛りには紫・白相交りて美観なり」。
(90)　『風土記』「難波農家、さつき甚大木也」。
(91)　現東大阪市、『風土記』「髪切山、くらかりより十丁斗北の方、道のり五里」。
(92)　現高槻市。
(93)　『風土記』「所々にありといふ共勝曼を第一とす。前日よりにきはしき也」。
(94)　現神戸市東灘区、『摂津』「北畑村にあり。（中略）本荘九村の生土神とす。毎年六月七日

十　日　うハしま（宇和島）御やしき（屋敷）祭
十四日　住吉御湯[95]
同　なんば（難波）祇園祭[96]
同　いづも（出雲）御やしき祭[97]
十五日　三つ八まん（御津八幡）祭[98]
同　勝まん（曼）毘沙門まつり[99]
同　なべしま（鍋島）御やしき祭[100]
同　中国御やしき祭
同　西宮まつり[101]
同　天王寺蓮花会[102]
十六日　夕日神明まつり
同　阿波御やしき祭
十七日　御霊まつり[103]
同　摩耶山千日参り[104]
十八日　高津天皇祭
同　ちくご（筑後）御屋しき祭
同　明石御やしきまつり
同　箕面山法会[105]
廿　日　露の天神祭[106]
廿一日　はくろ（博労）町いなり（稲荷）祭
廿二日　西成惣社座摩宮祭
廿五日　天満天神祭
同　福島上・中・下天神祭[107]
廿八日　東成惣社生玉祭
廿九日　玉造いなりまつり
同　さかい（堺）魚夜市
卅　日　住吉御はらひ（祓）[108]
同　いばら（茨）住吉祭
同　永代浜住吉祭[109]
同　神明夏越祓（なこしのはらい）[110]
同　尼ケ崎貴布祢（きふね）祭[111]
同　兎原住吉まつり[112]
○涼み　大川なにハはし（難波橋）西[113]・四つはし（橋）
［図］「網島夕立」

七　月

七　日　住吉虫ぼし（干）[114]
同　天王寺太子堂法会
八　日　七度（堂）浜おどり（踊）念仏[115]
十　日　天王寺千日参り[116]
同　中山寺千日参り[117]
同　藤（葛）井寺千日参り[118]
十五日　天王寺一度結願[119]
同　北の（野）綱敷天神祭[120]

より神輿を社前に飾り、十四日に至るまで村民集まりて祭祀を行ふ」。

(95)　『摂津』塩湯「この日近世より諸人社頭に群参し住吉浦の潮水に浴し、百病平癒を祷るに霊験炳然（いちじる）し」。泥湯とも。

(96)　『風土記』難波牛頭天皇祭。

(97)　『風土記』「当月諸方御蔵屋敷祭礼、中国・出雲・阿波・肥前・筑後・薩摩（立売堀下屋敷）・柳川、右之外あまたあれど略す。（中略）物まね・造り物などの催しあり」。

(98)　『風土記』「御渡りハなしといへ共色里なれバ俄・ねり物、他の氏地の及ふ物にあらす」。

(99)　『風土記』長町毘沙門祭「初更の頃よりおわたり有。長町よりしよまん坂の上、夫よりひしや門堂へ」。

(100)　『大成』稲荷神祠「鍋島御蔵やしきの鎮守なり。例年六月十七日十八日祭礼あり。奉納の生花、つくり物等ありてすこぶる賑わし」。

(101)　現西宮市、『摂津』西宮神社例祭。

(102)　『摂津』「講堂蓮華会」。

(103)　『浪華』夏祭神輿渡御。

(104)　忉利天上寺か。

(105)　現箕面市、『摂津』如意谷村如意輪寺。

(106)　俗称お初天神。

(107)　『摂津』「上福島・中福島・下福島三所にあり。いづれも菅神を祭る。毎歳六月二十五日天満祭の時神輿供奉の船この所より出づる」。

(108)　『摂津』晦日大祓、「神輿開口に神幸す。開口とは堺の宿院なり。俗に御旅所といふ」。

(109)　『大成』「同所にあり。六月廿九日・卅日浜辺に住吉の神社をかざり立華麗なる提灯・幟・吹抜・旗等を立つらね、干魚・塩魚の商家これを祭る。（中略）尤平生ハ跡形もなく此両日に限りて社頭の如し。浪花の一奇観也」。

(110)　夕日神明宮。

(111)　現尼崎市、貴布祢神社。

(112)　現神戸市東灘区。『摂津』菟原住吉社例祭。

(113)　『風土記』「月頭より北浜肥前屋敷まへより川へむけ床を出す。すゝみ（涼）船多く、花火をてんじいさぎよき事いふ斗なし」。

(114)　『摂津』「一の神殿へ社務出でて神宝改あり。神宮寺の社僧は読経所に出でて虫干あり」。

(115)　現堺市、七堂浜。

(116)　『風土記』「千日参りとて夜の内より天王寺

同　　住吉すもふ（相撲）儀式[121]
十六日　七墓めぐり（巡）[122]
同　　勝尾（かちを）寺千日参り[123]
十九日　米子御やしき（屋敷）祭り[124]
廿　日　生田まつり[125]
廿四日　八尾地蔵祭り　道具市あり[126]
同　　信濃町地蔵祭[127]
　　せともの（瀬戸物）町つくり（造）物見事、其外市中所々の地ぞう（蔵）まつり
同　　久太郎町猿田彦祭
同　　池田愛宕火[128]
廿五日　一心寺虫ほし
△施餓鬼[129]
十三日　なんはてつげん（鉄眼）
十六日　長ほり（堀）心さいばし（斎橋）
十七日　大こく（黒）橋・下大和はし
十八日　ほりへ（堀江）市の側・なにハはし（難波橋）
廿五日　天満市場・今はし（橋）・ざこば（雑喉場）
廿六日　伝法経宗[130]
廿八日　同浄土宗
○灯篭　あみだ（阿弥陀）池・久ほうし（宝寺）町やくし（薬師）
　　十七日北のみどう（御堂）[131]
○蓮華　いく（生）玉[132]・弁天[133]・天王寺[134]・すみよし（住吉）
○虫音　尼寺・阿べの（倍野）・広田・大和川・袴屋新田

八　月

朔　日　さかい（堺）大寺まつり[135]　ほこ（鉾）でる
同　　いはら（茨）住吉すもふ（相撲）
同　　本庄すもふ
四　日　さかい天神祭[136]　ほこでる
八　日　天王寺上の宮祭
九　日　おくの（奥）天神祭[137]
十三日　みぬめ（敏馬）社祭[138]
同　　うはら（菟原）住吉祭
十五日　放生会ざま（坐摩）宮いなり（稲荷）[139]
同　　三つ（御津）八まん（幡）・目（眼）神八まん[140]
同　　安土町八まん祭
同　　天王寺すもふ[141]

へさんけい人多し。此日参れバ千日に向ふとて千日参りといふ。境内にハ槇のしんをうる」。
(117)　現宝塚市、『摂津』では9日。
(118)　現藤井寺市。
(119)　『摂津』講堂一夏結願（いちげのけちがん）「満座の後、豊後相撲あり」。
(120)　『風土記』「北野天神宮祭礼地車多く出づ。十四・十五日也。此御渡りハ十五日夕方御宮の少し南常安寺と申寺へ有之」。
(121)　『住吉』盂蘭盆会「相撲十番勝負の舞」。
(122)　これは大坂市中、八尾でもあり。
(123)　現箕面市。
(124)　『難波丸』「踊・作り物」あり。
(125)　現神戸市中央区、『摂津』生田神社「例祭七月三十日、また八月二十日」。
(126)　現八尾市、『風土記』「大市あり。古道具・かけ椀色々のからくた物をもち行て商ふゆへにからくた市といふ」。
(127)　『風土記』「市内諸方に多くあり。又寺々にも多し。その中にも西横堀瀬戸物町ハ第一にて是につぐ物なし。造り物多くしてくんじゆ」。
(128)　現池田市、『摂津』「五月山にあり。（中略）毎年七月二十四日群参して数の灯炉を照らして法会を修す。この夜大坂天満の野原より星のごとくみゆる。これを愛宕火といふ」。
(129)　『風土記』「当月盆後、所々川々にて寺々の水燈川せかき有。多くは禅寺なり」。
(130)　正蓮寺の俗称。『風土記』「伝法法花寺にせがき経木ながし有。尤大せがきなれバ参る人多し。又其翌日浄土宗のせがきもある也」。
(131)　『風土記』18日「津村御坊にて京より下りしとうろうを見物に行人あまたあり」。
(132)　「花のしをり」北向八幡池。
(133)　『浪華』生玉弁財天祠「社頭に蓮池ありて、夏日には紅白の花咲きみだれて美観なり」。
(134)　「花のしをり」天王寺池・南大門池・かゞみの池。
(135)　現堺市、開口神社・念仏寺。
(136)　現堺市、『全堺詳志』　2日・3日遷座祭。
(137)　住吉奥天神社。
(138)　現神戸市灘区、『摂津』「岩屋村にあり」。
(139)　『風土記』「三津八幡宮・座摩宮に式あり。鳥放しハ十五日やり、十六日有。また安土町三丁目に祭のまねひ有。造り物等多く賑ふ」。

十八日　あさか（浅香）山祭り[142]
同　西宮広田祭[143]
同　能勢七面宮法会[144]
同　長田まつり[145]
十九日　安居天神まつり[146]
廿　日　住吉九月会定[147]
同　生田まつり[148]
廿一日　みかげ（御影）まつり
廿二日　西宮まつり[149]
廿三日　伊丹天王祭[150]
○月見　玉造いなり[151]・さくら（桜）の宮・うぶゆ（産湯）・川口元ふね・天保山・山さき（崎）[152]
○彼岸　二月同断
○萩　三番村[153]・ゑんどうし（円頓寺）・今宮[154]・てつげん（鉄眼）・安居・尼寺・上の宮・神宮寺・梅やしき（屋敷）・松尾・ほう丸
○沙魚（はぜ）釣[155]　木津川・天保山

九　月

朔　日　さうつうまつり
同　喜連村まつり
同　田なべ（辺）まつり[156]
同　有馬加茂村祭[157]
三　日　うのべ（宇野辺）まつり[158]
九　日　生玉まつり
同　天王寺十五社神拝
同　野田村天神祭
同　鳥かい（養）西村まつり[159]
十　日　久々知まつり[160]
十一日　丹生山田まつり[161]
十二日　真田山まつり[162]
十三日　住吉宝市[163]
△月見　八月同断
十四日　なんば（難波社）まつり
同　高つき（槻）まつり[164]
十五日　三（御）津八まん（幡）まつり
同　玉つくり（造）いなり（稲荷）祭
同　天下茶屋天神祭[165]
同　天王寺念仏会[166]
同　能勢地王まつり[167]
同　白しまむら（島村）まつり[168]
十六日　桜の宮大神宮祭[169]
同　夕日神明まつり

(140)　『摂津』西天満「不動寺の南にあり。諸人眼病平愈を祈るに土細工の鳩を備ふ」。
(141)　7月15日の誤りか。
(142)　現堺市、『摂津』浅香山稲荷祠。
(143)　現西宮市、『摂津』「後の例祭」。
(144)　現能勢町。『摂津』真如寺「地黄村にあり。（中略）七面明神祠、当山の上にあり」
(145)　現神戸市長田区、長田神社。
(146)　『摂津』20日神祭「これを芝原祭といふ」。
(147)　『住吉』「相撲会定之神事」。
(148)　現神戸市東灘区。
(149)　現西宮市、『摂津』西宮神社例祭。
(150)　現伊丹市、『摂津』野宮牛頭天王例祭「天王町にあり」。
(151)　『風土記』「（月見の）場所ニてハ玉造りの舞台などよく、至れりとするハ桜の宮に上をこすところなし」。
(152)　『浪華』「（難波）橋の中央より西の方に中の島の端あり。これを山崎の鼻と号す」。
(153)　『風土記』「大日寺を初、農家所々ニ有」。
(154)　『風土記』「今宮広田社、近年甚しけ（繁）くなりて繁昌す」。
(155)　『風土記』「中頃より九月へむけ多く出る。其方角ハ安治川口・木津川口・尻なし川なと」。
(156)　『摂津』田辺神祠、「南田辺村にあり、山阪明神と称す」。
(157)　現川西市、『摂津』加茂村大神宮。
(158)　現茨木市。『摂津』井於（ゐのべの）神社「宇野辺村にあり。（中略）今三所明神と称す」。
(159)　現摂津市、『摂津』鳥飼西邑藤杜神祠。
(160)　現尼崎市、『摂津』久々知妙見堂「久々知村広済寺にあり」。
(161)　現神戸市北区、『摂津』荘中村八幡宮例祭。
(162)　真田山稲荷、嬪山（ひめやま）稲荷社の俗称。
(163)　『住吉』相撲会「此神事に商人社頭に出て升をあきのふ、世俗是をたからの市と称し」。
(164)　現高槻市、『摂津』野見神社「（高槻）城内にあり。（中略）今牛頭天皇と称す」。
(165)　『大成』子安天満宮の俗称。
(166)　『摂津』六時堂念仏会。
(167)　現能勢町、『摂津』地黄村野間神社例祭。
(168)　現箕面市、はくのしまむら。『摂津』為奈都比古（いなつひこの）神社例祭。
(169)　『風土記』「片町の辺り地車を出す。是を布

同　　森の宮まつり
十七日　打出むら（村）まつり[170]
同　　池田穴織（あなおり）まつり[171]
十八日　高津天皇まつり
同　　今宮やぶさめ（流鏑馬）[172]
同　　池田呉織（くはおり）祭[173]
十九日　大仁村まつり[174]
廿　日　おはつ（初）天神祭
廿一日　はくろ（博労）町稲荷祭[175]
同　　名塩八まんまつり[176]
廿二日　座摩まつり
同　　うらべまつり[177]
同　　土佐御やしき（屋敷）能
廿三日　かしま（加島）まつり[178]
［図］「廿五日　天満天神流鏑矢馬（やぶさめ）」
廿六日　そうせんじ（崇禅寺）いなり祭
廿七日　御りやう（霊）まつり
卅　日　住吉神送神事[179]
△諸方より角力
九日ほりこし（堀越）　十日まへだれ（前垂）島
十三日こつま（勝間）　十六日びしやもん（毘沙門）　十七日木づ（津）　十八日ながら（長柄）
廿五日てらしま（寺島）　卅日今宮
○菊　　高津吉介・同木綿屋
　　其外花だん（壇）諸方ニあり[180]
○茸がり（狩）　中山・勝尾寺・箕面山・甲山・泉原（いづはら）[181]・有馬
○目白取　新清水・安居、此辺多し

十　月

朔　日　大わだ（和田）まつり
五　日　ことうら（琴浦）まつり[182]
十　日　金毘羅祭[183]
同　　千日ほうせんじ（法善寺）
同　　高津・生玉・いなり（稲荷）
同　　丸亀御屋しき（敷）
同　　高松御屋しき
同　　あみだ池・天満寺町
　　此分つくりもの（造物）あり、其外処々にあり
十三日　法華えしき（会式）[184]
十四日　浄土十夜、[185]あみた（阿弥陀）池おつうや（通夜）
十五日　天王寺びんつる（賓頭盧）祭[186]
廿　日　誓文払、[187]戎参り

子たんしりといふ」。
(170)　現芦屋市打出天神社、『摂津』「金津山の側らにあり、打出村の生土神とす」。
(171)　現池田市伊居多神社、あやは神社。
(172)　『摂津』「流鏑馬の祭事・豊後相撲あり。この日神輿を四天王寺石衡門（いしのとりい）にわたし神供を備へて音楽あり」。
(173)　現池田市呉服神社、くれは神社。
(174)　現八坂神社。
(175)　『摂津』秋祭、「神馬の渡りあり」。
(176)　現西宮市、『摂津』「例祭として神前において翁三番叟あり、これを面掛祭といふ」。
(177)　『難波丸』浦江村天皇祭、牛頭天王社（現素戔嗚尊神社）のことか。
(178)　『摂津』加島村稲荷神祠例祭。
(179)　『摂津』晦日玉出島御祓、「また北祭とも号す。諺に云ふ、当社も出雲の大社に行きたまふゆゑに神送といふとぞ。社説云ふ、これはなはだ非なり。（中略）玉出島は当社の秘区、この所において祓を修する事ことに深秘あるなり」。
(180)　『風土記』「菊花盛、高津毛綿屋、東天満大源、これ等古き株にて名高けれ共今ハ所々にうるはしき菊花壇山の如く出来」。
(181)　現茨木市、『摂津』泉原山「この山季秋の頃松茸多し。山民取つて茨城の市に出だす」。
(182)　現尼崎市、『摂津』琴浦神祠「東新田村街道の北側にあり」。
(183)　『風土記』「また讃州象頭山へも参詣多し」。
(184)　『風土記』御影講「会式ともいふ。日蓮上人御命日也。生玉・中寺町八丁目なと造り物有」。
(185)　『風土記』「円光大師御命日也。此日も寺々賑はしく、別してあみた池参詣多し。通夜の諸人へあづきかゆ（小豆粥）を出ス」。
(186)　万塔院か。『摂津』「賓頭盧等を安置」。
(187)　『風土記』夷講「当所にてハ誓文払といふ。商人おのおの祝ふ也。さて又呉服店ハ小切をうる。その外さの屋橋渡辺さまのまへ、天満裏門のほとりの古手屋いつれも小切をうるゆへ、女中の買て山の如くおしも分かたし」。
(188)　『摂津』「太子堂三十講会」。
(189)　『風土記』「寺中の庭なれと頗る見事なり。此外寺々の庭に少シ宛は有ど当寺に及はず」。
(190)　『浪華』「天王寺東門の北にあり。（中略）堂の後、僧坊の庭前に楓の大樹数株ありて紅葉の

同　　今宮・堀川・三つ（御津）八幡
同　　南久太郎町・浪花はし（難波橋）
　　西宮出張祭り　つくりものあり
　　市中呉服屋・太物屋・古手屋等小きれ（布）安うり（売）おひたゞしく賑ふ
廿三日より十一月七日迄天王寺三十講会[188]
廿四日より廿八日迄両御堂報恩講
○新綿船出帆　川口にきわしくけいきよし
○紅葉　高津ほうじゆじ（宝樹寺）[189]・天王寺しゆほうじ（寿法寺）[190]・奥の天神・ふくや（福屋）[191]・西照庵[192]・みの尾（箕面）・牛たき（瀧）[193]・大道村
○時雨　さらし堤[194]・新清水

十一月

朔　日　三島江鴨社祭[195]
八　日　玉造いなり（稲荷）御火焼、吹子（鞴）祭[196]、所々にいなり祭
十　日　河堀（こぼれ）天王祭[197]
十一日　神明御火たき
十二日　御初天神御火焼[198]
十三日　こくぞう（虚空像）まゐり
同　　生玉御火たき[199]
十五日　三ツ八まん（御津八幡）御火焼[200]
同　　堺天神まつり
［図］「十五日　座摩宮　鳥懸」[201]
十六日　天王寺どうろく（道陸）祭[202]
同　　平の（野）町神明御火焼
同　　天王寺道祖神祭[203]
同　　きびまつり（吉備祭）[204]　△舎利講
同　　大念仏仏幸供養[205]
十七日　御りやう（霊）御火たき[206]
十八日　天満天神御火焼
十九日　天神御旅御火たき
同　　旅篭茶屋中惣判
○顔見世　道頓堀、けいきよし
○おし鳥（鴛鴦）　下寺町たいこうじ（大広寺）・北山・清荒神
○千鳥　川口・御前さき（崎）・天保山

十二月

六　日　役者惣判[207]
廿　日　角力くじ取[208]
廿一日　大師講
廿四日　天満市のかハ（側）みかん市
○雪見　ときふね（解船）丁・高づ（津）・清水

時節には眩きがごとし」。
(191)　『浪華』「天王寺石の鳥居の西、一心寺の北の傍にあり。席上、庭前の好み風流にして四時ともに遊客間断なくいと賑はし」。
(192)　『浪華』「月江寺の裏門の西にありて、浪花に名高き貨食家（りょうりや）なり。（中略）庭中林泉・席上の普請風流にして」。
(193)　現岸和田市、『風土記』「堺より六里、諸山一面のこうえふ（紅葉）絵にかくともおよはぬ」。
(194)　『大成』柴島「此辺淀河の流れをくみて布木綿をさらす。是を国嶋晒といふ。此堤（中略）俗にさらし堤と号し浪花の貴賤舟行してここに遊ぶこと平生（つね）にありて風流の地なり」。
(195)　現茨木市、『摂津』三島鴨神社。
(196)　『風土記』「七日、ふいこ節季（中略）、八日吹革祀、（中略）またこの日いなりに御火たきあり。玉造いなり也。その外宮々ごとに御火たきありといへとも日限定まらず」。
(197)　『摂津』崇峻天皇社「天王寺東門より四町ばかり江堀口にあり。この地の生土神とす」。
(198)　『難波丸』では13日。
(199)　『難波丸』では12日。
(200)　『難波丸』では13日。
(201)　『難波丸』16・17両日。『摂津』鳥掛神事。
(202)　『摂津』六万体、「すべて天王寺郷中に形ばかりの石像あり。（中略）十六日にはこの石仏に生鰯を供じ、顔に米の粉を塗り、笹に蜜柑と煎餅を付けて供養し、同日夕方には藁火を焼いて石仏を黒くし、明年の明年のと囃して踊る。これを道禄神祭といふ。（中略）この祭の二、三日以前より、里の童ども縄を路に引きて往来の人をとどめ、さをじやさおじや天王寺の作法じや、お太子さまの仰じやといひて鳥目を乞ひ、これをもつて供物を調へ、かの石地蔵に供ず。（中略）この祭を土人は泥くじり祭といひ」。
(203)　『難波丸』前註の泥くじり祭を道祖神祭とす。
(204)　現尼崎市、『摂津』吉備津祠。
(205)　『摂津』「当山の本尊は良忍上人八幡宮にをさめたまふを、法明上人神託によつて、河州交野郡茄子作村においてこれを授かりたまふ。これによつて毎年霜月十六日、茄子作にて仏幸供養ありとかや」。
(206)　『難波丸』では10日。
(207)　『戯場楽屋図会』「大坂に住する役者衆中残

ふたい（舞台）・西照庵・うぶゆ（産湯）・玉造いなり・京橋・川口・天保山

○節分[209]　地蔵めくり（廻り）・諸方宮寺参詣

日本第一年越恵方の社桑津村にあり

年中月並参詣

甲子　生駒山大黒天　丑日　天満天神・道明寺[210]　寅日　信貴毘沙門・長町　卯日　住吉　巳日　箕面・生玉弁天　午日　能勢・久々知・自安寺[211]・ほり（堀）川夫婦いけ（池）[212]、妙見宮　庚申　かうしん（庚申）、天王寺[213]・大ゆうし（太融寺）　八日　浜村鬼子母神[214]

毎月方会並ニ夜店

一・六　平の町神明・御りやう（霊）

三　日　幸橋北詰愈迦（瑜伽）大権現[215]

八　日　三ツ寺やくし（薬師）[216]・谷町梅のやくし・玉やはし（屋橋）やくし[217]

九日・十日　金ひら（毘羅）、生玉[218]・高づ（津）[219]・法善寺[220]・天満寺町・中の島御やしき（屋敷）[221]

十二日　やくし、前ニ同断

十三日　愈迦大権現

十五日　玉つくり（造）いなり（稲荷）

十八日　やくし、前ニ同断

廿三日　ゆうが（瑜伽）権現

廿四日　御茶湯地蔵[222]

廿五日　天満天神

毎夜店

天満十丁目筋[223]・蜆橋[224]・本町松屋町筋[225]・順慶町[226]・松屋町すじ（筋）二ツ井戸・心さいばし（斎橋）筋[227]・日本橋南・道とんぼり（頓堀）・新町西口井戸の辻[228]・日吉橋

△常賑場所

座摩・ばくろ（博労）町いなり・御霊・てんま（天満）天神・法善寺・あみだいけ（阿弥陀池）[229]・御池ばし・難波新地[230]・道頓ぼり・松屋町[231]・堺すじ・心さいばし[232]・（天満）十丁目すじ・北新地

四季風興

日の出　玉造いなり（稲荷）ふたい（舞台）[233]

しのゝめ　源八のわたし（渡）[234]

入　日　なには（難波橋）・清水ふたい[235]・天

らず（中略）役所につめるなり。役者・若衆一切御法度の趣を承りそのうへにて印形」。

208　『難波丸』「勧進すもふくじ日」。

209　『風土記』「めくりにより早春ともなる。此日夜へかけ恵方参りとて湯あみし櫛けづり、衣服をもあらため氏神へ詣ず。又年越蕎麦とて食す。夜に入バ厄はらい色々の頓作をいひて町々をありく」。

210　現藤井寺市。

211　『浪華』妙見堂「能勢妙見尊同体にして、（中略）衆人群集すること法善寺の金毘羅にひとしく、別て月毎の午の日は詣人潮の涌くがごと」。

212　『浪華』「近来堀川条を新鑿ありて淀川の流れを通ずるにより、（中略）池は埋みて平地となり、ここに能勢侯の邸を建てられ、門内の傍に妙見尊を勧請あり。これは摂州野間村妙見山の本尊同体の霊像にましませば、（中略）別して午の日は御縁日なりとて参詣おびただし」。

213　『浪華』庚申堂「天王寺南門の南三丁ばかりにあり。本尊は青面金剛を安ず。（中略）当所は日本最初の庚申にして」。

214　『浪華』「霊験あらたなりとて遠近より歩みを運ぶ人間断なく、（中略）わけて例月八日群集して賑はし。いはゆる浪花北方の流行神といふべし」。

215　『浪華』「備前国児島郡瑜伽山権現を勧請する所にして、例月三日・十三日・二十三日等は別て詣人群をなし、道条（みちすじ）の左右夜店などありて賑はし」。

216　大福院の俗称。

217　玉江橋の誤り、『浪華』「中の島、玉江橋南詰にあり。（中略）毎月八日・十二日諸人群参す。これに依つて往来の左右に夜店出でてすこぶる繁昌なり。俗に常安町の薬師と称す」。

218　『浪華』「金毘羅祠、（生玉北向）八幡の前、馬場先の角、持明院の寺内にあり」。

219　『浪華』「宮（高津宮）前の石橋を梅の橋といひ、（中略）この橋の下に瑜伽社あり。寺を自性院といふ。（中略）金毘羅祠等あり」。

220　『浪華』「この地は芝居の傍辺なるゆゑ四時ともに喧しく、殊に神霊新たにして応験いちじるしきとて昼夜参詣雲霞のごとく、（中略）況や例月十日においてをや」。

221　『浪華』高松金毘羅社「高松御蔵やしきに有

保山[236]
春　秋　ねこま（猫間）川[237]・ほり（堀）川[238]・十三・本庄つゝみ（堤）
夏　ハ　川遊山・網舟・川狩・魚釣
冬　ハ　俳諧・雑俳（わきつけ）・絵口合（ゑくちあい）・拳会・諸芸納会

毎月めくり所

大師めくり　毎月廿一日[239]

一	ごりやう（御霊）	宝城寺
二	北の（野）	ふどうじ（不動寺）
三	同	たゆふじ（太融寺）
四	てんま（天満）東寺町	宝珠寺（宝珠院）
五	小ばせ（橋）	こふとくじ（興徳寺）
六	ゑさし（餌差）丁	観音院
七	てんわうし（天王寺）	五重塔
八	いく（生）玉	持明院
九	同	じぞう院（地蔵院）
十	同	かくおん院（覚園院）
十一	同	持ほう院（持宝院）
十二	いく玉	南坊
十三	同	まんだら院（曼陀羅院）
十四	同	へんしやう院（遍照院）
十五	同	医王院
十六	同	真蔵院
十七	同	観おん院（観音院）
十八	同	桜本坊
十九	かうづ（高津）	ほうおん院（報恩院）
廿	同内	知しやう院（自性院）
廿一	島の内	三津寺
道法	百八丁	

毎月十日　金毘羅廻り　三り十四丁

一	さぬき（讃岐）御やしき（屋敷）	御宮
二	てんま（天満）西寺町	正象寺
三	九之助ばし（橋）上生駒丁	遥拝所
四	中寺町たへま寺	大雲寺
五	生玉	慈明院
六	かうづ（高津）	報恩院
七	下寺町大れんじ（大蓮寺）	応典院
八	千日	法善寺
九	あみだいけ（阿弥陀池）	和光寺
十	御りやう（御霊）	宝城寺

り。（中略）別て当社はその御国の第なれば、殊更に（霊験）新たなりとて晴雨の差別なく詣人多し。毎月九日・十日には別て群参なすゆゑにこの辺より常安町通に夜店ありて賑はし」。

(222)　『浪華』「農人橋すぢ、百間長屋の角にあり。石像にして長二尺ばかり。祈念の者茶湯を供じ、かつ茶湯を請けて煎薬に加へ、あるいは悩める所に塗れば必ず平愈すといふ」。

(223)　『風土記』「（天満宮）表門辺より浜まで」。

(224)　『風土記』「南側」。

(225)　『風土記』内本町松屋町「南北」。

(226)　『摂津』「夕市は四時たえせず。夕暮より万灯てらし種々の品を飾りて、東は堺筋、西は新町橋まで両側尺地もなく連りける。これを見んとて往きかへりて群をなし、その好みに随ふて店々にこぞる」。

(227)　『大成』「心斎ばし南詰より戎橋まて凡七丁許の間両側毎夜内店出店すき間なくつらなり万灯をてらし其賑ひいふばかりなし」。『浪華』「夕には古本の市ありて殊更に賑はし』。

(228)　『浪華』「（新町橋）東の方一丁ばかり東の辻に井（いど）ありて、俗に井の辻といへり」。

(229)　『浪華』阿弥陀池「この地は北堀江御池通りにして、蓮池山和光寺と号す。（中略）境内に堂舎多く、かつ市店ここかしこにありて、詣人平日に絶ゆることなく頗る繁昌なり」。

(230)　『大成』「此辺ハ泊り茶屋軒をつらね昼夜ともに賑しき地也。初春より小見世ものを興行ししばしば繁昌なり」。

(231)　『浪華』「北は天神橋に通じ、南は下寺町に至る。往来すこぶる繁し」。

(232)　『浪華』「この心斎橋通りといへるは諸商売闕ることなく、貴きとなく賤きとなく雅俗ともに打ち混じ、求むるに乏しからず。至つて弁利の市街なり。なかんづく書物を商ふ家多く、（中略）買ふ客平日に絶ゆる事なく、求むるにあらずといふことなし」。

(233)　『浪華』「本社の後に舞台ありて、この所より東の山々眼前に連なりて風景斜ならず」。

(234)　『大成』「天満源八町の浜より中野（村）への舟わたしなるを以て号くるなるべし」。

(235)　『浪華』新清水「堂前の舞台より遥かに西南の遠山滄海の光景真妙なり。かつ、この一両年以来境内の巽の方に水条（みづすぢ）を通じ、

毎月十八日　観音めくり[240]

一　北の（野）	たゆふじ（太融寺）
二　てんま（天満）	長ふくじ（長福寺）
三　同	はふちうじ（法住寺）
四　同	ほうかいじ（法界寺）
五　同	神　明
六　同	大きやうじ（大鏡寺）
七　同	長善寺（超泉寺）
八　同	でんたうじ（善導寺）
九　同	りつとうじ（栗東寺）
十　玉造	いなりの社（稲荷社）
十一小ばせ（小橋）	興とくじ（興徳寺）
十二同	けいでんじ（慶伝寺）
十三かうづ（高津）	遍明院[241]
十四上寺町	長安寺
十五同	せい安寺（誓安寺）
十六あわざ（阿波座）[242]	藤のたな（藤棚）
十七	長願寺（重願寺）
十八いく玉（生玉）	本せいじ（本誓寺）
十九同	ぼだいじ（菩提寺）
廿　天王寺	六時堂
廿一同	経　堂
廿二同	こん堂（金堂）
廿三同	講　堂
廿四同	まんだら院（曼陀羅院）[243]
廿五同	清水寺
廿六下寺町	心光寺
廿七同	大かくじ（大覚寺）
廿八同	金だいじ（金台寺）
廿九同	大れんじ（大蓮寺）
卅　島内	三つでら（三津寺）
卅一立花丁	大ふく院[244]
卅二ばくろ（博労町）	いなり（稲荷）
卅三	御りやう（御霊）
道法　五り半	

七福神廻り　毎月　朔日・十五日・廿八日

一布袋尊	ふどうし（不動寺）南の門前	善通寺
二大黒天	同　東門前	五智院
三福禄寿	坂丁（町）うら	大げんじ（大建寺）
四寿老神	さなだ（真田）山	稲荷
五弁財天	いくだま（生玉）	南坊
六多門（聞）天	長丁（町）	大乗坊[245]
七蛭子尊（ゑびすてん）		今宮

新たに滝を作り、岩をつみ、樹木を植ゑ」。

(236)　『浪華』目標山「この山は四面の眺望に露ばかりも障りなく、風景美観なるがゆゑに四時ともに遊興の人絶ゆることなく」。

(237)　『浪華』「天保八、九の年間御仁恵によつて川幅を広くし、底深く溝（さら）へしめたまふ、（中略）さる程にこの流に橋を架し、岸には新たに家作し、あるいは花紅葉の樹、山吹・芳萱（はぎ）の類ひを植ゑて春秋の美観とす」。

(238)　『浪華』「旧は戎の社よりおよそ二丁余にて堀留なりし程に、岸の辺には塵芥を高く積みて、あたかも山のごとくなるゆゑに、俗ごもく山など号けし見苦しき地なりしが、近年これより東へ淀川すぢまで新たに開鑿あらせられしより、大川の清水通じ、その流れ潔く、堤には桜の木を植ゑつらね、かつ通船心のままなるゆゑに、花の頃には遠近の老若ここに集ひ、騒人・墨客打ち群れて幽艶を賞す」。

(239)　『難波丸』等の日にち・順番に異動あり。

(240)　『難波丸』等の順番と異動あり。

(241)　俗称野中観音。

(242)　阿波座は誤り。『摂津』藤棚観音「谷町条（すじ）玉木町にあり。知勝院と号す」。

(243)　『難波丸』等では万灯院。

(244)　『難波丸』等では白髪町、白洲崎観音。

(245)　俗称長町毘沙門。

(246)　『摂津』「ここ（四ツ橋）に源蔵張とて煙管（きせる）の店あり。世に名高し。四ツ橋を以て煙管の銘とするなり」。

(247)　『浪華』「この所に革烟草嚢（かわたばこいれ）を販（ひさ）ぐ家多く名物とす」。

(248)　『大成』「玉造の郷中に是を製し賈（あきな）ふ家許多（あまた）あり、その数あげて枚（かぞ）へがたし。さるほどに此地の婦女子平生に鯨の筋を割て弦に製するを手業とす。是他邦にすくなき職にして浪花の一奇といふべし」。

(249)　大和田か、『摂津』「この所（中略）河海の界なり。ゆゑに魚鱗多し。ことに鯉多く集まればつねに漁す。これを大和田の鯉搦といふ」。

(250)　『大成』「同村（木津村）より出るもの色うるわしく味ひ美なり。尤隣村難波・今宮・勝間の辺にも多く出せり。皆これに類す」。

(251)　『風土記』「このほとりの物をすべて天王寺とよぶなれど本物の畑はわづか也」。

二十一社めくり　毎月朔日

一	平の丁（平野町）	神明宮
二	川さき（川崎）	権現御宮
三	同	桜の宮
四	てんま（天満）	天満宮
五	北の（北野）	綱布天神
六	同	神明社
七	そねさき（曽根崎）	露の天神
八	せんば（船場）	御霊社
九	同	座摩社
十	同	稲荷社
十一	三ッ（御津）	八幡宮
十二	なんば（難波）	祇園社
十三	さか丁（坂町）	天満宮
十四		高津社
十五		生玉社
十六		北向八幡
十七		安居天神
十八		今宮社
十九		広田社
廿		大海神
廿一		住吉社
道法	四り十八丁	

浪花名物集

四ッ橋きせる[246]・淀屋橋南艸入（たばこいれ）[247]・玉造唐弓弦（ゆみつる）[248]・ひへ（稗）島木綿・川口鯉[249]・ほり川泥亀（すつほん）・木津にんじん[250]・天王寺かふら[251]・天満大根[252]・市岡西瓜[253]・泉原（いつはら）松茸・小松なすび[254]・黒門白瓜[255]　此分なら漬にて諸国へ積出す、とらやまんちう（虎屋饅頭）[256]・駿河屋ようかん・砂ばそば（砂場蕎麦）[257]

遊所新町　旅籠屋

北の新地・なんば（難波）新地[258]・幸丁・ふかり[259]（深里）・新川[260]・北安治川[261]

諸方市相庭所

金	なにハはし（難波橋）[262]	綿	長堀[263]
米	堂しま（島）	米	江戸堀[264]
同	新やしき（屋敷）	同	天満一丁目

［図］「天王寺西門牛市の図」[265]

(252)　『大成』「東ハ淀川より西ハ曽根崎の辺まで培養（そだつる）ものよし。就中長柄鶯塚より西南池田町のほとり迄に生ふるもの殊更よしといへり」。

(253)　『大成』新田西瓜「市岡・泉尾の新田より出すもの他産に超て味ひ美なり。」。

(254)　『風土記』「日本無類、なら漬に用ゆる物にてたきなすびにハ手か届かぬといへり」。

(255)　『大成』「平野口町に黒門といへる地あり。（中略）此地において夏の頃名産の越瓜（しろうり）を蠶ぐ、是によつて名とす。其出地ハ此所より東南にあたりて今里・中川・深江・片江・荒川等の辺の埴土（ねばつち）に相応してよく生立なり。（中略）此瓜粕漬にして諸国に商ふ。浪花名産の一とす」。

(256)　『摂津』「高麗橋虎屋春繭店（かしみせ）、虎屋饅頭纔（わづ）か五文、店前終日（ひねもす）百花群がる、信牌（きつて）通用実に銀札、千里美名雲の走るに似たり」。

(257)　『摂津』「新町西口南、（中略）ここに蕎麭（めんるい）を商ふ家あり。難波の名物とて遠近ここに来集する事日々数百に及べり」。

(258)　『浪華』「当難波新地より九郎右衛門町・湊町・幸町の末まで旅舎（はたごや）の行灯家毎に輝き、昼夜ともに往来繁し。（中略）絃歌の声賑はしく、自ら滞留に日を重ぬる」。

(259)　『風土記』「道頓堀波吉橋より壱丁ほど西をいふ」。

(260)　『浪華』「この川は道頓堀、大黒橋西の傍より南へ難波村に通じ、公の御蔵・御船入にて堀止なり。この川岸常に賑はし」。

(261)　『浪華』「諸国の廻船ここに集ひて碇をおろし、（中略）新堀の旅舎に絃歌の声囂（かまびす）しく、その賑はひいふばかりなし」。船宿多し。

(262)　『大成』金相場浜「難波橋南爪の東ニあり。浪華市中の両替屋こゝに集り日毎に金の売買をなし、相場を立て金の価を定む」。

(263)　『風土記』「農人橋東詰より北まかりまて」。

(264)　『風土記』同（米市場）現銀店「江戸堀南側犬斎橋より大目橋迄。道頓堀戎橋北詰西へ又壱筋内へ西へ又壱筋内へ二筋斗」。

(265)　『大成』牛市遺風「石鳥居の西、石橋某より牛博労の切手を出すハいにしへ此地にて牛市あ

青物	てんま（天満）[266]	青物	ほりえ（堀江）[267]
同	なんば（難波）[268]	同	今宮
海魚	さこば（雑喉場）[269]	川魚	京はし（橋）[270]
川魚	渡海場[271]	塩魚	うつぼ（靱）[272]
塩魚	かいふほり（海部堀）[273]	同	しあんはし[274]
材木	長ほり	材木	立売堀[275]
薪	長ほり	炭	ほり江[276]
油	東ほり	菜種	平の（野）丁
植木	下寺町	花	松屋町
花	御とう（堂）前[277]	鳥	安土町東[278]

浪　華　　小　野　原　公　春　校　並　書

伏見書林	大坂町	亀屋半兵衛
大坂書林	平野町淀屋橋西入	石川屋和助

［図］　浪華のひなみ
浪花津にさくやこの華冬こもり
いまを春やとさくやこの花

諸方道法高麗橋ヨリ

今宮へ　一り（里）	天王寺へ　三十丁
住吉へ　二り	さかい（堺）へ　三り
勝田（しょうた）村へ　一り半	
あさか（浅香）山へ　二り十丁	
平野へ　一り	八尾へ　三り
信貴山へ　五り十八丁	田辺村へ　一り半
道明寺へ　四り半	藤井寺へ　四り
野さき（野崎）へ　三り十八丁	牛瀧へ　四り
大道村へ　二り余	十三へ　一り
神さき（崎）へ　二り	本庄へ　三十丁
ずいかうじ（瑞光寺）へ　二り余	
箕面へ　五り	勝尾寺へ　六り半
池田へ　四り半	伊丹へ　四り
多田へ　六り	能勢へ　九り
有馬へ　十り	名塩へ　七り余
甲山へ　六り	尼ケさき（崎）へ　三り
西のみや（宮）へ　五り	なだ（灘）へ　七り
摩耶へ　八り半	須磨へ　十三り
天保山へ　二り余	野田へ　一り
茨住吉へ　一り	

りし遺風なりとぞ。故に諸国より犢（こうし）を許多つれ来りて切手を求むること常に絶ず」。

(266)　『浪華』「この市場は日々朝毎に数万の商人あつまりて菜蔬を売り買ふことあたかも潮の涌くがごとし。（中略）わけて秋の松茸・栗市、冬の蜜柑市等は夜の市にして松明・挑灯を数多照らしていさましく、目覚むる心ちせらる」。

(267)　『大成』堀江市の側「北堀江二丁目にあり。青物の市場にして天満の市にひとしく、野菜及び果実、其余万の土産を諸方より運送して、此所にも市にひさぐ也」。

(268)　『大成』難波市場「当村祇園社の鳥居の前通より木津の辺まで凡五、六丁許の間毎朝市あり。その品青物をはじめ鮮魚・塩魚・乾魚・乾物および何くれとなく持あつまりて販ぐ」。

(269)　『浪華』「この地は江戸堀・京町堀等の末にして、鮮魚の市場なり。（中略）わけて夏六月朔日より夜市なれば炬火（たいまつ）・篝火を焼きて売り買ふその光景目ざましく夥し」。

(270)　『浪華』「この橋の北詰において朝毎に川魚の市あり。（中略）なかんづく鼈（すっぽん）を以て市の終となす」。

(271)　『大成』「土佐堀の西の端にあり」。

(272)　『摂津』「初め靱町生魚・乾物の問屋のわいだめもなかりしが、後世別れて阿波座へ引き移し今新靱町といふ」。

(273)　『大成』永代浜干鰯市「海部堀ニあり。此浜辺数多の土蔵ありて諸国より積上る干鰯をおさむ。（中略）又是を諸国へ商ふ」。

(274)　『大成』思案橋、「東堀に架せり、川条十三橋の内上より第五橋目なり」。

(275)　『大成』材木浜「立売堀・長堀等の両岸にあり。其外横堀・東堀等にも数多軒をつらぬるといへども、市をたつるハ立売ほり・長堀に限れり」。

(276)　『大成』『堀江川の両岸および道頓堀の下ニあり。いづれも堅炭の問屋」。

(277)　『大成』「南御堂の門前より北久太郎町通りへかけて毎朝花作りの農夫四時をりをりの草木の花をもち来りて地上につらねてこれを販ぐ。（中略）尤、花の市ハ上町松屋町通りにもあり」。

(278)　『大成』八百屋町飛禽肆（とりみせ）「備後町・安土町の間、八百屋町通りの両側鳥屋の店のきをならぶ。故に俗に鳥屋町といふ」。